



今回のレント達の任務は、  
ある山奥に放棄された建物に巢食ったと思われる  
マーゴの討伐である。

ただ、いつもの任務とは違い、  
クラス1と2の新人マーゴハンターを10数名同行させ、  
現場経験を積ませる新人研修任務となっていた。

新人研修任務には難易度がそれ程高くは無いたものが選ばれ、  
更に不足の事態を想定して、  
クラス4以上の高ランクマーゴハンターが引率として  
数人同行するという安全策もとられている。

そんな任務の今回の引率はアイシャとカルミアという  
レントにとってはいつもの、そして何よりも心強い2人だったので  
今日のレントは珍しく気楽に任務に従事していた。

現地に到着するとまず、通信機が繋がりにくいというトラブルが発生する、

どうやらこの山に原因があるらしいが、すぐの解決は難しいという事で、出来るだけ隊を分けずに行動する事になった。

建物内には下級マーゴが十数体いたものの、大きなトラブルも無く任務は順調に進んでいたが、

その最中に別の建物がある事を発見する。

発見された建物は2棟、どちらも規模としては小さかったが。確認をしないで帰るわけにもいかない。

ここで問題になったのが時間。

時刻は午後3時頃、

今回は夜間任務は行う予定は無く、  
また新人達はまだ昼夜通して行う長時間任務の経験も無い為、  
日没までに任務を終えなければならなかった。

どうすべきかアイシヤとカルミアが相談する中レントが、

建物の一つは私1人で調べてきてもいいですか？

と提案する。

新人の安全を考えれば  
アイシヤとカルミアが分かれて行動しない方がいい。  
時間的な事も考えればこの手が打倒ではないかと思ったのだ。

カルミアはその提案に難色を示したが、

アイシヤは  
小さい方の建物であれば任せてもいいんじゃないかと  
レントの提案を受け入れた。

レントとしては実質自分の後輩にあたる新人に  
ちよつといい格好をしたかっただけという所もありつつ、  
自分でもちよつと背伸びをした案という自覚もあつたのだが、

師匠であるアイシヤが  
その背伸びを含めて受け入れてくれたのかなと思うと。  
それが何よりも嬉しくて、危険な一人での任務のはずなの  
レントの足取りは軽く、少々舞い上がった気持ちになっていた。

建物内部に入って何分か、道中下級マーゴ2体と遭遇したが、難無く倒し、次の部屋に入ろうかとするレントが足を止める。

（何か、いるね。）

その部屋は広く、倉庫の様に使われていたらしく様々な工具や大きな木箱などが打ち捨てられていた。

その片隅でなにかが蠢いている、それは蟲の様な長い脚を幾つも生やしたマーゴが絶賛お食事している所だった。

少し離れたレントからも食べられていた女性が生きていないのは明らかだった。

（頭が見当たらない……まさか、食べたの？）

頭部の無い体からエネルギーが取り出せるのかは分からないが、マーゴが人間の体を弄ぶ事は珍しい事ではない。

だが下級マーゴは体にそもそも固形物を処理する器官が無いので、何かを食べるといふ事はしない。

それが出来るようになるのは――

（見た目が整ってない……という事は中級か……）

中級マーゴは化け物じみた形態をとるものが多いが。

一説には最初に取り込んだ人間が持つ

強いものや  
優れたもの

のイメージを取り込みそれを材料にして形態を構築するらしい。

レントは中級マーゴに1人で相対した経験は何度もある、  
どのマーゴも一筋縄ではいかず  
敗北を喫したこともある。

(先輩みたいに正面から交渉……  
なんて芸当は私にはまだ無理だよね……)

レントはアイシヤが  
マートは絶対して平和的？な交渉を試みる様を何度も見ている、  
成功率が絶望的に低い事を本人は気にしているが、  
レントにしてみれば交渉の成否よりも  
マート相手にそういふ選択できる強さに憧れるのだが、  
今レントに出る芸当ではない、  
なのでレントは奇襲という選択を取らなかった。――

「よしっ」

奇襲は見事成功し、レントはマーゴの討伐に成功する。

その後は他の部屋等がないか調べるが  
どうやらこの部屋が  
最後のようだった。

「まだ通信は回復しないし、  
これ以上先はなさそうだから撤収かな……」

「ギ、ギ　だれだ貴様！」

「っ……っ」

突然の声の方を見ると、  
先程倒したマーゴに似たようなマーゴが天井にいた。

（もう一体？、いや、複数？ 数が分からないのはまずい。）

対処を考え始めるレントに  
マーゴは喋る度にギシギシと頭が擦れる様な不快な音を立て、  
先にレントに倒されたマーゴの残骸の方を見ながら言う。

「ギシ、ギシ よくもオレの弟を、やってくれたな、ギ、ここはオレ達2人がやっと  
見つけた家だというのに。」

「へ、へえ、そうなんだ、でもこつちもマーゴハンターなんでね、  
弟さんのした事は見過ごせないんだよ。」

「でも、これ以上人間を襲わないって約束してくれたら、  
身の振り方の相談に乗るけど、  
どうかな？ 憎しみは何も生まないと思うんだ……。」

マーゴがこれ以上この場にいないという情報が  
偶然聞き出せたのは運が良かった、  
ならこの幸運が続くと信じて、アイシヤの常套句を真似してみたのだが……

「ギンシイイ！ ギギ！！ 貴様ア！！  
おれの弟を殺し！ 仲間を殺し！ 住処を  
うばいに来たヤツが！！ ヤツに！！  
降参などすると思ふのかああああ！！！！」

「ああ、……怒らせちゃった……」

顔の造形敵に表情と呼べるのはせいぜい目の様な部分だけなのだが、  
それでもマーゴが激怒しているのがありありと分かる位だ。  
そしてレントはある事に気づいてしまった。

（アレ？ でもよく考えたら……あっちのいう事も正論だよな、

……先輩……私、先輩が失敗しまくる理由が分かった気がします。）



「何度吹いても無駄だよ!」





マーゴのガス攻撃には要警戒、

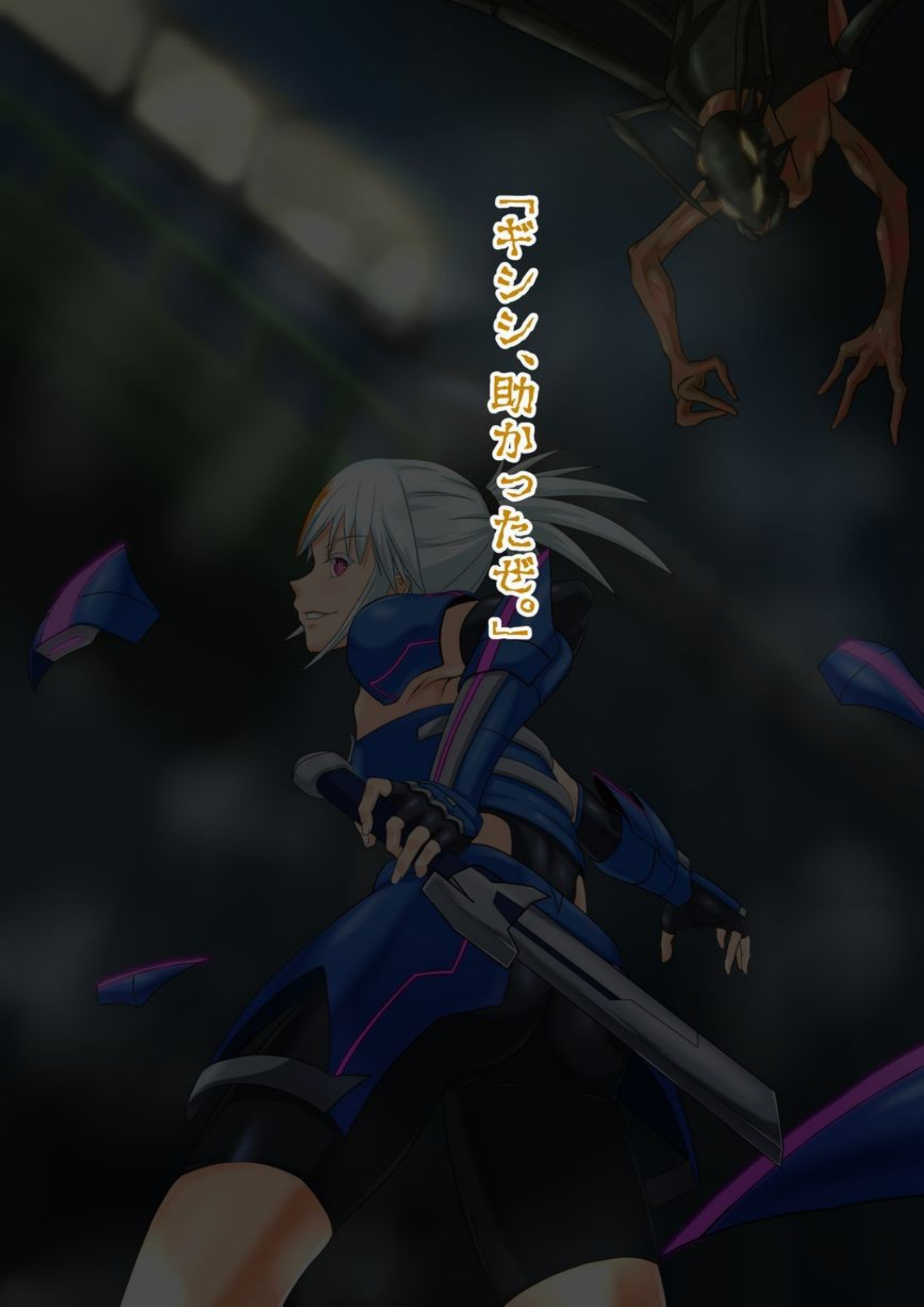
マーゴハンターの戦闘時の基本である。  
抵抗力を奪う毒や発情させる強力な媚薬ガス等、  
マーゴ由来のものに安全なガスなど一つも無いのだ。

狭い場所でのガス攻撃は対応が難しくなる事もあるが、  
幸いこの場所は広く、  
一部の割れた窓などのお陰で密閉されているわけではない。

レントはマーゴのガスを  
プロペラの様に組み合わせたランゲアで次々に霧散させていく。


毒等の効果も無いみたいで目くらましのガスと判断したレントは、  
腰に帯刀した短剣イドラケアに手を掛けようとする。

「ギン、助かったぞ。」



「アッ」





蜘蛛型マーゴが笑みのようなものを浮かべたようにレントが感じた直後、レントの体の動きが止まる。

体の至る所に糸のようなものが絡みついていて見えた。そしてその糸は虚空から出てきているように見えた。

「な、何これ!？」

「ギ、シ、オレのガスはな、糸になるんだよ、ガスがただだよって所であればどこからでも糸を出す事が出来るんだ。」

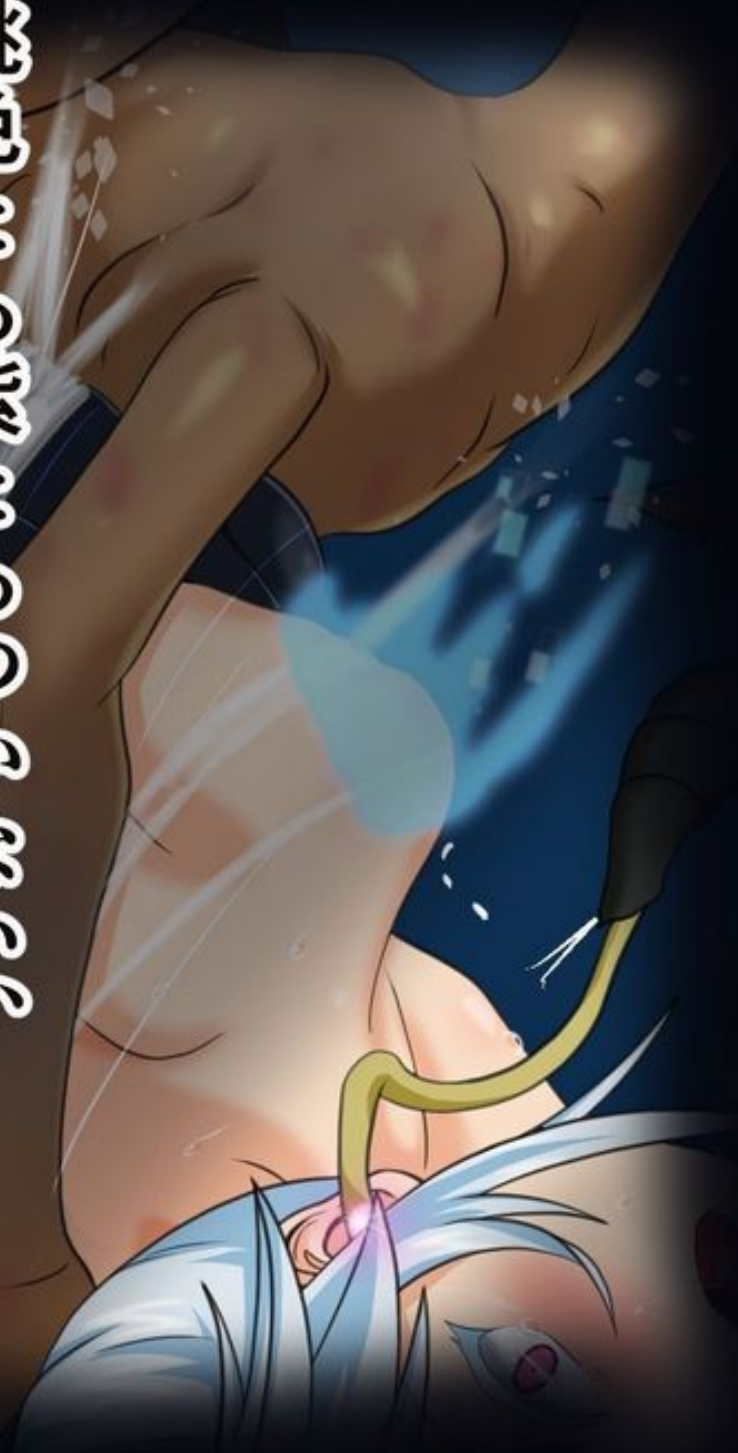


「……はなつ、せよ、  
このつ……」





桃色とも紫ともつかない、  
マゴーが使う淫気特有の色をした  
球状の輝きが  
レソトの耳に突き込まれた肉の管を  
スルスルと通り、  
中へと入っていく……









レントをガス糸で捕らえたカブードラは、更に強固な拘束を慣れた手際で彼女に施す、その過程で開いた顎から触手状の肉管を出し、それをレントの耳に挿入した。

カブードラはまず獲物を糸で捕らえ、その後、相手の頭に直接淫気を注入する。

ある程度濃縮した淫気は獲物の脳内で弾け、神経の流れに乗るかのように瞬く間に全身に広がりその快楽で抵抗力を奪う。

ただカブードラは淫気の強さを決めるのが得意では無く、これまではこの仕込み作業は弟に殆ど任せていた。

淫気の濃縮加減を間違えると人間ならば簡単に壊れてしまう、だがマーゴハンターの頑丈さならば多少適当でも問題は無いだろうとカブードラは考えていた。

実際捕らえたマーゴハンターは淫気球1〜2個程度では反抗の意思が消えた様子はなかった。

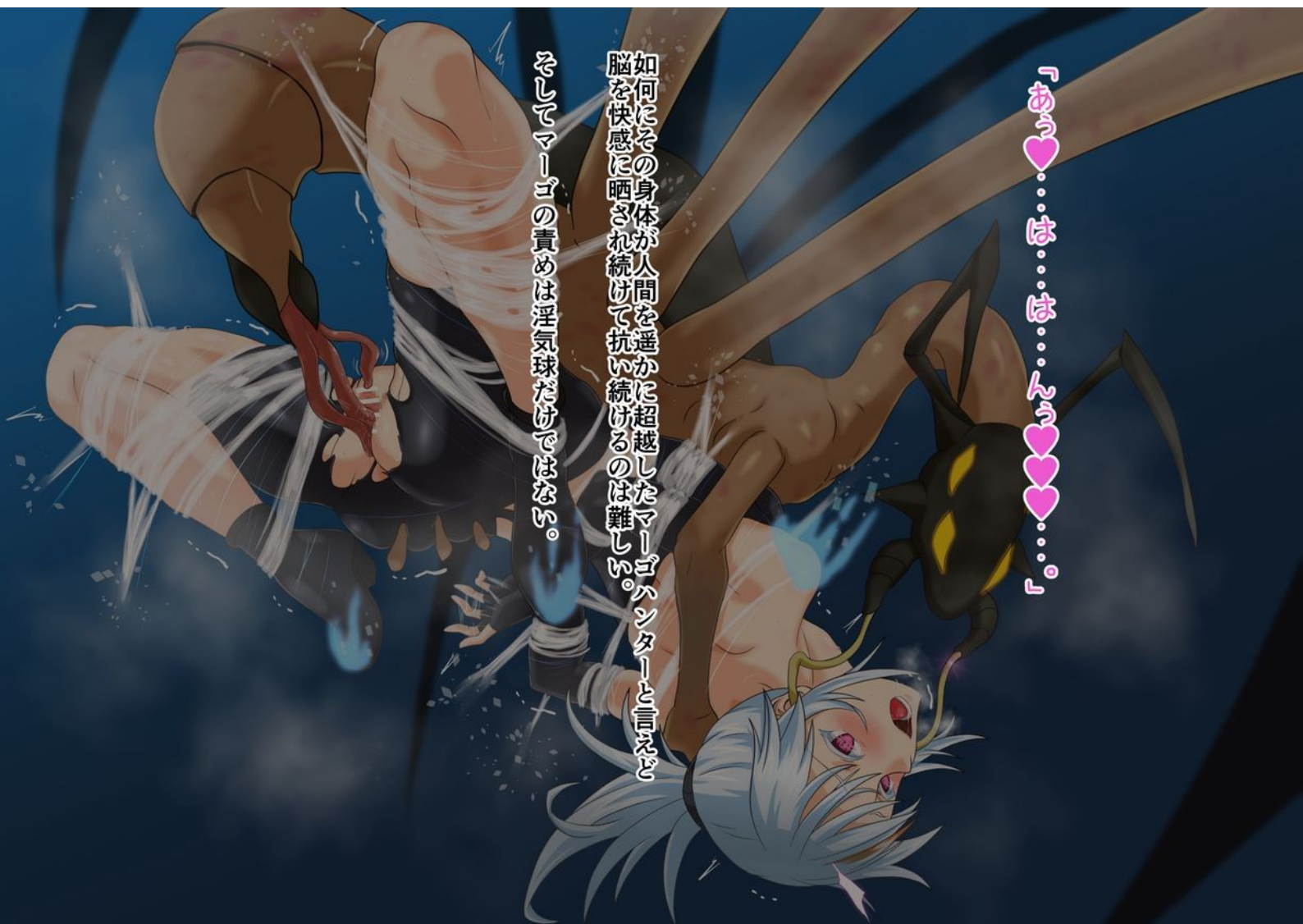
だが、10個を超えた辺りから快楽に抗えなくなったのか大分夫人しくなり始めた。

今ので頭に送り込んだ淫気球は16個目だ。




「あ……は……は……ん……♡♡♡♡♡」

如何にその身体が人間を遥かに超越したマーゴハンターと言えど  
脳を快感に晒され続けて抗い続けるのは難しい。  
そしてマーゴの責めは淫気球だけではない。





「んひい♡♡あはん♡♡やゆ♡♡せう♡  
紙めああ♡♡な♡♡で♡♡」



マーゴには吸引管が存在するが、カブドドラの吸引管は3枚の大きな舌の様な特殊な形状をしており。それらがレントの大事な部分を執拗に舐めまわしていた。

一枚はクリトリスを丁寧かつ絶妙な加減で舐め、一枚は膣口の入り口はほぐしつつ浅い挿入を繰り返す、一枚は先の2枚に合わせアナルをタイミングよく刺激する、

それぞれの舌の表面はしっとりとした質感で、  
きめの細かいスポンジのような構造をしており、  
その内部には媚薬粘液がたっぷりと内包されている。

強く当てれば媚薬が染み出して性器を濡らし、  
更にスポンジ独特のざらりとした感触を思わせる表面で  
舐めまわされれば、  
そこから得も言われぬ快感が生まれる。

そんな舌状の吸引管が1枚1枚繊細かつ異なる動きをし、  
更にはそれぞれ異なる振動までするのである。

カブードラは自身のテクニクにかかなりの自信をもっており、  
実際責められていたレントの反応も満足のものであった。



18個目の淫気球がレントの頭の中で弾ける。

（あふあふ♡…これ…ちゅめ、いや、なの♡だ…  
イっちゃ、う♡♡♡…まもさち…イト…♡♡♡）

弾ける度にレントの思考は桃色一色に染め上げられる。

淫気球の快感は最初は強引なもののだが、  
それが体の隅々へと伝播し始めると  
適度な痺れを伴う心地よすぎる感覚へと変化する。

併せて行われる生殖器へのじゅっくりと、  
かつ的確な責めに、レントは体の中心から全てを蕩けさせられる  
ような快感を味わわれ、  
容易く絶頂へと打ち上げられてしまう。



「はぁ、うん♡んぎ…うん♡んぎ…はぁ。」


この危機から脱する為の策を考えねばならない、  
だから齒を食いしぼり、この快感の沼から抜け出そうとするレントだが、  
それを見透かされたように性器を刺激されれば、  
沼がスライムのようにレントを包み込み引きずり戻す。  
だが性器への刺激に抗ったとしても…。



「んはあうー♡♡♡♡♡  
だめえー♡♡♡♡♡  
やめろー♡♡♡♡♡  
みみろ♡♡♡♡♡

耳に挿入された肉管がくちゆくちゆくとレントの耳穴をかき回す、  
それだけでレントの体は淫気球無しに絶頂を迎えてしまう。





遠隔操作系のアニマウェポンを持つマーゴハンターは一部の感覚が非常に敏感になると言われている。

特に耳は敏感になる者が多く、

理由としてアニマウェポンを操る為に必要な空間認識する為の情報や気圧や空気の流れ等で得ており、それを最も感じられるのが耳だと言われているからだ。

そんな敏感な箇所をマーゴの手に絡めとられ発情させられてしまえば、そこは極上の快楽を生み出す弱点となってしまう。

「はふ…んあ…♡♡♡ひゃ…める…♡♡」

「ギヂ、ギン いい反応だな、だがまだ前戯だぞ？  
そんな様でオレのイチモツに耐えられるのか？ ギンシ。」

レントの性器を責めていたカブドドラの舌状の吸引管が  
捻れるようにまとまりながら溶け合い、  
表面に様々な大きさのこぶが生えた長夫で野太い吸引管に変化する。

そして躊躇う事なくそれをレントの蕩けきって柔らかくなった膣口にあて、  
ゆっくりと貫き進行してゆく。

「あぁっ！」

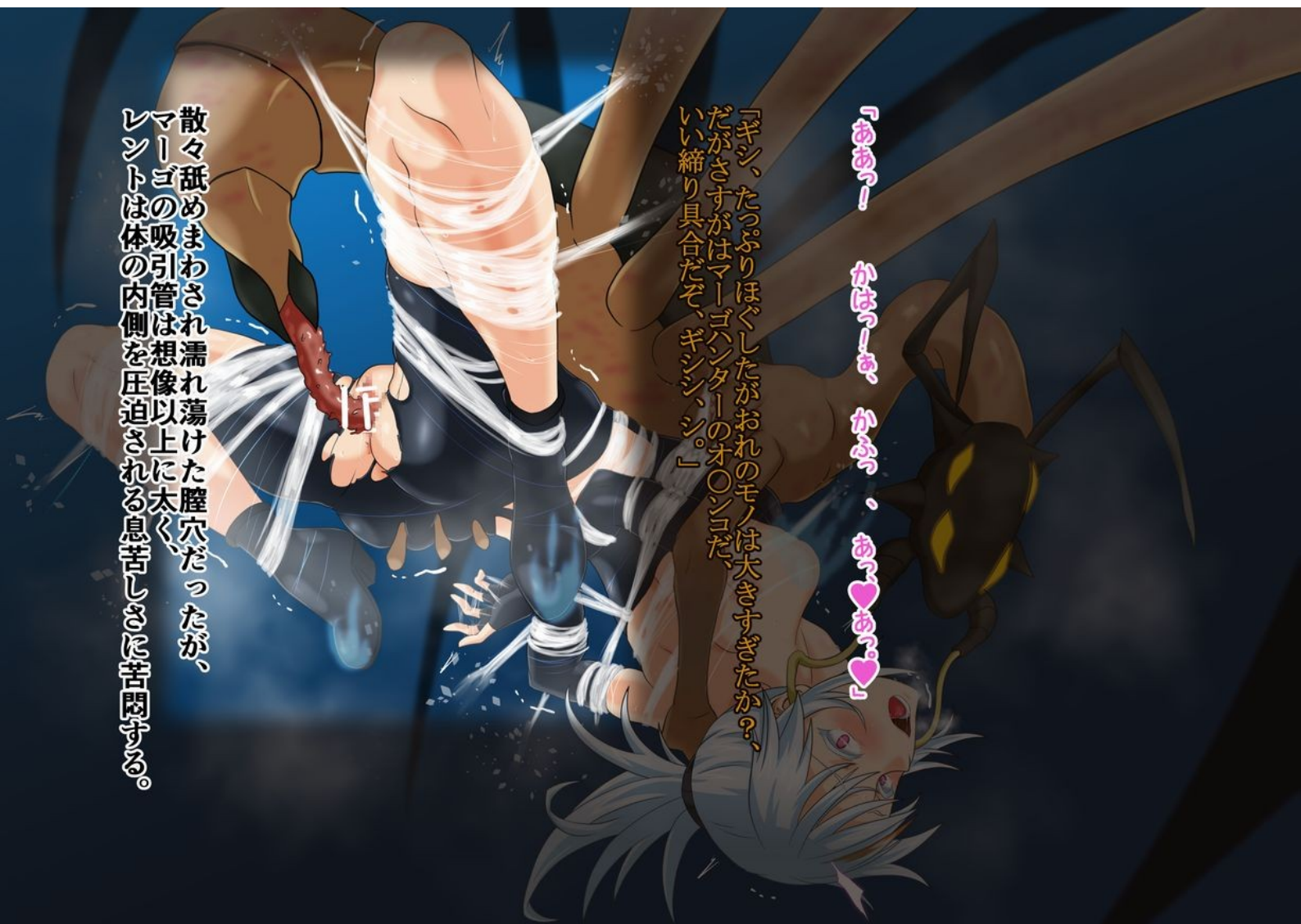
かはっ！ま、

かはっ、

あっ♡あっ♡♡

「ギン、たっぷりほぐしたがおれのモノは大きすぎたか？  
だがさすがはマーゴバンターのオ○ンゴだ、  
いい締め具合だぞ、ギンシ、シ。」

散々舐めまわされ濡れ蕩けた腔穴だったが、  
マーゴの吸引管は想像以上に太く、  
レントは体の内側を圧迫される息苦しさに苦悶する。



「ギン、ずいぶんと淫乱なマーゴハンターだなあ？  
まだいれたばかりだったのに、マ○コから汁が止まらねえじゃねえか？  
こりやあ今まで何人も男をくわえ込んできたマ○コにちがいないえな、ギン」

「うひゃあ〜♡♡♡ そんなにや〜♡♡♡  
んあぁぁ♡♡♡ ふうんあぁぁ♡♡♡」

カブドラの卑猥の言葉を否定しようとするレントだが、  
子宮を潰さんばかりの突き上げに言葉は遮られ、  
艶めかしい喘ぎが漏れる。

「ギン、それじゃあ1発出させてもらうぜ？ おっと、  
勘違いするな、早いわけじゃないぜ、  
お前のマ○コに塗ってた媚薬をな、お前の膣に出してやるのさ、  
ギン、シとびきり濃縮したやつをな、ギンシンヤ。」





「んあぁっ！」

ああ！

ぶぁぁぁー！







「あは、やったあ……」

ねえの、キス……したいな……できるの？」

「ギンシ、勿論できるぞ、  
おら、舌出しな。」







マーゴは倒した、後はアイシャ達に合流するだけなのだが…

「…んっ…はぁー、はー…ちよつと、よくないな…」

腔内に大量に注がれた媚薬の効果がレントの身体を苛むのか、息もまだ整わず、身体に上手く力が入らず立ち上がる事が出来ない、

更には、

「…うう、寒い…、替えの服…どうしよう…。」

先程大量に被った水が想像以上に冷たく、疲弊した体から体温を急速に奪っていた。

しかも今回の任務はそこまで大変な事にはならないだろうと、スペアの戦闘服を用意してこなかったのだ。

ビリビリに破けた戦闘服でどう合流するか考えていた時、主の元に戻ったヒュドラランゲアからピピピ！という音が発せられた。

その音はヒュドランゲアに取り付けていた予備の通信機のものだった。

(あれ？、通信できないんじゃない？)

と思いながらスイッチを入れると、聞きなれた師匠の声が聞こえた。

「…レン、いかにマイシヤ、聞こえる？」

「…はい…聞こえます…。」

レントはまだ息が整わないので言葉が若干たどたどしくなってしまうそうなるが、頑張って受け答える。

「なんか日が落ち始めたら通信が回復したんだよ！」

「…へえ…そうなん、ですか…。」

「変な場所だよね、で、そっちの状況は？」

「…なんかあった？」

「…中級のマーゴが、2体、いました…。」

「えっ!?!、2体も?、状況は!?!  
もしかしたら戦闘中!?!」

「いえ、なんとか2体共…倒しました。」

「ホント!?!、凄いじゃん!?!」

「それで、ですね…その…あの…」

「ん?」

「ちよつと、ですね…やられて…しまっまって、  
替えの、服が無くて…」

「…ちよつとまって。」

アイシャの口調がそれまでの口調とは打って変わって真剣なものになる、一度通信機を離しているのか、何か指示を出しているのが聞こえる、それも数秒の事ですぐにアイシャから、

「…うん、位置は確認した、今からあたしがそっちに向かう、  
…10分待てる?。」

という心強い返答が帰ってきた。

「はい…大丈夫です。」

「じゃあすぐにそっちに行くね、一応油断しないように。」

そう言って通信が切れる。

「。。。はあ。。。良かった。。。」

レントの口から安堵の言葉が漏れる。  
通信が回復したという事は  
通信機に入っている位置情報機能も回復したので  
レントの場所もすぐに分かったのだろう、  
後はアイシャの到着を待つだけだ。

ギンギンギンギン。。。。。

「え。。。!?!」

その直後。  
聞いた覚えのある異音にレント戦慄する。

それは一直線にマーゴへと降り降るされ……。





「よし、…レン、生きてるか？？」

まだ残ってる炭片が完全に消滅するのを確認するとアイシヤはいつも仲間の無事を確認する常套句をレントに投げかける。

「…先輩…助かり、まし、 あっ…。」

レントはアイシヤの元に行こうとするが、緊張が解けた所為か、足に力が入らなくなり倒れそうになる。

「おっと、  
！？、どうしたの！？、ずぶ濡れじゃない！、

しかも冷たっ！」

倒れそうになる弟子を受け止めたアイシヤはレントが全身濡れ鼠になっている上に体が異常に冷たくなっている事に驚いたが、すぐに腰のアニマウエポン、メデューザから毛布を取り出し、レントに被せる、  
そして近くにあったおそらく以前は休憩用として使われていたベンチに二人で腰を掛けた。

「ほら、こっちおいで。」

アイシャはそう言いながらレントの肩に手をかけ、自分に密着させるように引き寄せる。そしてぼんやりと身体が光り出し、その光をレントに伝播させる。

「ほへへあつたかい〜。」

アイシャのエネルギー属性は「熱」で、その熱は他の人にも伝播させることができる、レントは酷く寒い日の任務ではよくアイシャに引っ付いては温めてもらっていた。

「…という事がありました…。」

アイシャに温められながらレントが状況を簡単に説明する。

「**そつかく、マーゴの媚薬は身体の中に入るとツライからね、  
…まだ寒い？」**」

アイシャは先程から温めているにも関わらず  
まだ身体を震わせているレント  
に心配そうに声をかける。

「…はい、寒いのにお腹が熱くて  
なんか気持ち悪いです。」

そう言うレントに、

「…分かった、」

と少し思案しそう言う  
とぼんやりとした光を強くし始める。

（あ、いつもとなんか違う…？）

アイシャから伝わってくる熱の質が変わったのを  
レントは感じた、  
少し熱めの熱が  
レントの体の内部に浸透してくるような感じで、  
それが芯まで冷えた体に心地よく、  
更にはお腹に在った嫌な熱さを  
塗りつぶしていくようだった。

「ちよつと熱いかもしれないけど我慢ね。」

「全然平気ですけど、。。。先輩？これって浄化とかですか？」

先程まであった媚薬の効果がもう殆ど感じられず、  
どんだん体が楽になっていく感覚を  
不思議に思ったレントがアイシヤに質問すると。

「いや、そこまでのものじゃないよ、  
今レンの体の機能がおかしくなってるから  
熱を送って体の内側を活性化させてるって感じかな。」

「へへ、  
なんかお腹の気持ち悪い感じも無くなった気がします。」

「それはお腹の部分だけ熱の膜みたいので包んでるからだよ、  
少なくとも帰るまでは媚薬の効果は抑えられると思うよ。」

ただ効果を消せたわけじゃないから帰ったら先生の所に直行ね。」

「は〜い、でも凄いですよね。。。私にも出来るかな？」

アイシヤは事も無げに言うが  
最近属性エネルギーが発現したレントから見れば  
そのエネルギーの扱い方は高度で  
とても真似出来そうになくて  
ついそんな言葉が口をついて出てくる。

「できるよ、  
多分レンの毒の方が  
あたしより浄化つぼい事が出来るんじゃないかな。」

「ホントですか？」

「まあ、コントロールは難しいけどそれは練習すれば大丈夫。ただ、どんなに上手く出来るようになっても自分にだけは効果が無いのよ。」

ちよつと微妙だよね」と苦笑いするアイシャにレントは

「それでも…できるようになりたいです…。」

と答えるが、言葉尻が少しぼんやりする。

少し熱めとは言われたアイシャの熱だが、  
疲弊しきって冷たくなつたレントの体には心地良すぎて、  
一瞬眠りに落ちてしまひそうになつたのだ。

しかし救助され身で眠り込むのは流石にまずい気がする、  
そう思ったレントはちよつと気になつていた事の会話で  
眠気をごまかす事にした。

「先輩、今回私も報告書つて書くんですよね？」

「うん、今回はあたしの指示での単独任務扱いだし、  
マーゴと遭遇して倒してるからそうなるね、」

「…?…ああ、そういえば  
単独任務の報告書を書くの初めてか。」

マーゴハンターは任務の後に報告書を書く義務がある、  
チームの任務では代表が、個人の任務では本人が書く。

レントはこれまでトラブルでの単独任務はあつても  
それ以外はチームでの任務ばかりだったので  
単独の報告書を書く事がこれまで無かつたのだ。

「はい、で、その…エロい目に合わされた時って何か特別な用語とかがあるって聞いた覚えがあるんですが…。」

報告書は任務の過程や結果、遭遇したマーゴの生態や能力を記載し、その情報は今後のマーゴ対策に生かされる。

だがマーゴの生態として性感攻撃は当たり前、凌辱されたりするのも茶飯事である、なのでそういった事をされた者への精神的な配慮から行為まで報告する必要は無いのだが、より多くの情報を得る為に、そういった行為を隠す用語が多数存在する。

「うん、色々あるね。」

「で、ですね…その…色仕掛け、的な用語って…どうなんですかね…」

「…え？、色仕掛けしたの？」

「ま…まあ、必死だったもので。」

「……どんな事言ったの?。」

「え……そういう事聞きますい。」

「いいじゃない、教えてよい。」

「やです……!。」

「おう、嬢ちゃん、言うてみいや、ホレホレ、恥すかしがらずに姉ちゃんに言うてみい。」

「もう! 先輩のゲス!。」

「へへへ、じゃあ今回は一緒に書こうか、やりながら教えたい。」

「わーい、お願いします。」

「？」

そんな他愛ないやり取りもひと段落した辺りで、アイシヤは肩にかけていた手を離しレントの頭を撫で、

「よく頑張ったね。」

優しい声音で労いの言葉を掛けた。

今回は少し背伸びして単独行動したものの、

マーゴにボロボロにされ、最後は師匠に助けて貰えなければ本当に危なかった。  
レントとしては非常に格好悪く、反省点ばかりの任務だった。

でもアイシャが褒めてくれて、レントはそれが凄く嬉しかったので、  
今だけはその嬉しさに身を任せる事にした――。

「えへへ、やった〜。」

